

腔炎が引き起こされます。代表的な症状は、風邪による発熱、頭痛、倦怠感などに伴って起こる鼻づまりや、鼻汁が多量に出ることなどです。

● 慢性副鼻腔炎

慢性副鼻腔炎の多くは、急性副鼻腔炎を放置しておいたために悪化させたり、頻繁に繰り返したことが原因で起こると考えられます。炎症が繰り返し起こると、鼻粘膜の肥厚が進み自然孔が狭くなります。また副鼻腔の粘膜が腫れて、自然孔を塞いでしまうこともあります。さらに、副鼻腔内にたまった液体や細菌を鼻腔に押し出す線毛の働きも弱くなります。そのため、本来なら鼻腔に流れていくはずの液体が副鼻腔にたまるようになります。この液体からは、組織を破壊する物質がたくさん放出されるので、ますます副鼻腔内の炎症が悪化するのです。副鼻腔炎が悪化すると、線毛の働きはますます弱くなり、自然孔も閉塞してしまうので、副鼻腔内には常に液体がたまっているという状態になります。これがさらに副鼻腔の組織を障害する…という悪循環が繰り返されることになるのです。また、鼻の内部の構造が副鼻腔炎の慢性化と関係している場合もあります。たとえば、鼻の内部を左右に分ける鼻中隔（びちゅうかく）の彎曲がひどい場合や、先天的に自然孔が狭い人、線毛の動きが弱い人などです。このような場合、副鼻腔内の空気がよどみやすく、副鼻腔炎が慢性化しやすいといえます。

慢性副鼻腔炎の症状としては、粘液性の鼻汁や鼻づまり、鼻汁がのどに流れ落

ちる後鼻漏（こうびろう）などの他に、頭痛や頭重感、顔面圧迫感などもよく見られます。これらの症状がひどいと、集中力の低下や注意力散漫、疲労感などを引き起こし、日常生活に支障が出ることもあります。さらに、臭いがわからなくなったり、鼻腔に鼻茸（はなたけ）という良性のポリープができる場合もあります。鼻茸のある人の大半は、慢性副鼻腔炎だといわれています。

診 断

● 問診・視診

問診によって症状の経過などを調べ、またアレルギーの有無に関してもよく確認します。視診は、鼻鏡や内視鏡という器具を使って行います。鼻粘膜に麻酔薬や血管収縮薬をスプレーしたり塗ったりしてから、鼻の内部をくまなく観察します。

● 画像診断

慢性副鼻腔炎の場合は特に、画像診断が有効です。画像診断には、X線検査とCT（コンピュータ断層撮影）検査があります。副鼻腔にたまった膿などは、X線検査で診断できます。副鼻腔粘膜の炎症や微妙な腫れなどを確実に診断するには、CT検査が適しています。

治 療

急性副鼻腔炎の治療法には、大きく分けて「薬物療法」「ネブライザー療法」「排膿洗浄」の3つがあります。慢性副鼻腔炎も同様ですが、2ヶ月以上これらの保存